



タイのヒット映画に見る地域性と時代性

平松 秀樹

本稿では、タイ映画のこの10年強の商業的に成功した作品を中心に引き上げ、そこに見られる作品の傾向、および背景にある時代性・地域性を考察していきたい。

まず、タイ映画の興行収入ランクを概観したいが、信頼ある統計を探すのは難しく、一つの例として、近年タイ映画を日本で精力的に紹介している「タイ映画ライブラリー」というサイトにあるタイ映画興行収入を参考にしたい。ちょうど2004年から掲載せられており、主としてIMDb(The Internet Movie Database)などのデータをもとに割とうまくまとめているので、上位10作品までを中心に抜き出すこととする(日本で公開あるいはDVD化されたものはその邦題、それ以外は英語タイトル、英語タイトルのないものはタイ語題名をローマ字およびカタカナで記した)。

ホラーとアクション

概観してまず目に入るのは、2004年1位の「心霊写真(ซัดเตอร์ กตติวิญญาน)」と2005年1位の「トムヤンクン! (ต้มยำกุ้ง)」であろう。ホラーとアクションというタイが世界に誇るジャンルの勢いを象徴している。「心霊写真」は、「シャッター(Shutter)」(2008)として落合正幸監督、奥菜恵出演でアメリカでリメイクされている。戦慄の恐怖を誘う純正のホラーでありコメディ要素はなく、後で述べる別の人気ジャンルであるホラー・コメディとは一線を画している。2011年3位の「Ladda Land(ลัดดาแลนด์)」もミュージカルにもなった人気ホラー作品である。こちらは「心霊写真」に比べればもう少し怖さは柔和で地味に映るが、前者のアップercut的な強烈さに対してボディブローのようなじわりとくる威力のある怖さである。2008年3位「Phobia(สั่นพรั้ง)」は4作の、2009年2位「Phobia 2(ห้านพรั้ง)」は5作のオムニバス・ホラー作品である(後者の一部の作品は日本の映画祭で公開されている)。ホラー人気はタイ国内でも根強く、今のところ衰え知らずである。

一方、「マッハ!!!!!!(องค์บาก)」(2003)以来世界に名を

表 タイ映画興行収入ランク2004年～2007年

2004年	
1	心霊写真
2	M.A.I.D
3	風の前奏曲
4	Pattaya Maniac
5	Spicy Beautyqueen in Bangkok
6	レター 僕を忘れないで
7	ガルーダ
8	The Eye 2(アイ2)
9	シスターズ
10	デッドライン
2005年	
1	トムヤンクン!
2	The Holy Man
3	Hello Yasothorn
4	Rahtree Returns
5	Dumber Heroes
6	Necromancer
7	ミッドナイト、マイ・ラブ
8	Ghost Variety
9	Seven Street Fighters
10	The Eye 3(アイ3)
2006年	
1	Noodle Boxer
2	ブルー・エレファント
3	Nong Teng Nakleng pukaotong (نون-เทน-นัคเกรน-ปูคาอ-ton)
4	早春譜
5	See How They Run
6	メモリー 君といた場所
7	ヌーヒン バンコクへ行く
8	Metrosexual
9	Dorm (My School)
10	Loveaholic
2007年	
1	THE KING ～アユタヤの勝利と栄光～(King Naresuan 1)
2	THE KING 序章 ～アユタヤの若き英雄～ (King Naresuan 2)
3	アルティメット・エージェント
4	Teng Nong Kon Maha Hia (Teng and Nong: The Movie) (เทน-نون-คอน-มาร์-ハー-ヒア)
5	Bus Lane
6	Kung Fu Tootsie
7	Ponglang Amazing Theater
8	The Bedside Detective
9	Alone
10	捨て犬マッカムの大冒険
11	The Odd Couple
14	ミウの歌～Love of Siam～
25	バンコク・ラブ・ストーリー

知られることとなったムエタイ・アクションスターのトニー・ジャー主演の「トムヤンクン!」では、今回は仏像ではなく象の奪還をテーマに闘う。タイでのブルース・リーなどという過大評価もあるが、2006年の「ロケットマン! (คนไฟบิน)」は19位と振るわなかった。題材は東北タイのロケット花火祭りのロケットを武器に悪人と闘う荒野のガンマン的な雰囲気だが、背景が少しローカル過ぎたであろうか。しかし、2008年の「マッハ! 弐!!! (องค์บาก2)」では再び1位に輝いている。2010年の「マッハ! 参!!! (องค์บาก3)」は11位であり、さすがに観客は食傷気味なのか往時の勢いはなくなっている。2013年の「トムヤンクン2」たる「マッハ! 無限大 (ต้มยำกุ้ง2)」も3位には位置しているものの、首位と一桁違いの興行収入であり、成績として芳しいとはいえない。トニー・ジャーは最近では「バトルヒート (Skin Trade)」(2015)や「ワイルド・スピード Sky Mission (Fast & Furious 7)」(2015)など海外の映画に積極的に出演している。

アクション映画の隆盛を示すさらなる標といえば、2008年5位の「チョコレート・ファイター (ช็อคโกแลต)」であろう。主演のジージャー・ヤーニン、タイでは希少な本格的アクション女優として登場し、トニー・ジャーの妹分としてスターダムを駆け上がった。「チェップ・チン」(まじに痛い)のキャッチフレーズで日本でも人気を博した。日本語版DVDは、ニューハーフのバレーボールチームを題材とした映画「アタック・ナンバーハーフ (สตรีเหล็ก)」(2000)とともに日本で最も普及したタイ映画の一つといえる。

先に触れたホラー・コメディとしては、「ブッパー・ラートリー」シリーズの人气が挙げられる。2003年の「Buppha Rahtree (บุพผารัตน์)」(邦題「609」)を皮切りに、2005年4位「Rahtree Returns (บุพผารัตน์ เฟส 2)」、2009年12位「Rahtree Reborn (บุพผารัตน์ เฟส 3.1)」、同20位「Rahtree Revenge (บุพผารัตน์ 3.2)」と、大ヒットとはいえないもののロングランな人気で、悪霊調伏のためにやってきた様々なゴースト・バスターたちが振り返りにあって退散する滑稽さが各回盛り込まれて見どころとなっている。最新作「Buppha Arigato (Haunting in Japan) (บุพผารัตน์ ภัย)」(2016)では最近のタイ人旅行者の訪日ブームを反映して北海道が舞台となっている。

ロマンティック・コメディ

しかしながら、ホラー、アクション隆盛のなかで、

表 タイ映画興行収入ランク2008年～2011年

2008年	
1	マッハ! 弐!!!
2	夏休み ハートはドキドキ!
3	Phobia
4	The Holy Man 2
5	チョコレート・ファイター
6	ランカスカ海戦 パイレーツ・ウォー
7	Art of the Devil 3
8	Coming Soon
9	Happy Birthday
10	The Last Moment
11	Boonchoo (ブンチュー) 9
16	temi / Kill Tim
2009年	
1	BTS-Bangkok Traffic (Love) Story
2	Phobia 2
3	32 December Love Error
4	Wong Kam Lao (ウォン・カム・ラオ)
5	Saranae Haw Peng (サラネー ハーオ・ペン)
6	Hello Yasothorn 2
7	Khan Kluay 2
8	Oh My Ghosts!
9	My Ex
10	ベスト・オブ・タイムズ
12	Rahtree Reborn
20	Rahtree Revenge
2010年	
1	アンニョン! 君の名は
2	Loser Lover
3	ア・クレージー・リトル・シング・コールド・ラブ
4	Saranae Siblor (サラネー シップロー)
5	Tukky (トゥッキー)
6	Lunla Man
7	Saranae Hen Pee (サラネー ヘーン・ピー)
8	Poh Taek (ポ・テーク)
9	マッハ! 参!!!
10	恋するリトル・コメディアン
11	The Holy Man 3
12	Eternity
13	The Shadow of Naka
21	ジェリーフィッシュの恋
24	Boonchoo (ブンチュー) 10
28	Yamada The Samurai of Ayothaya
35	ブンミおじさんの森
2011年	
1	King Naresuan 3
2	King Naresuan 4
3	Ladda Land (ラッダー・ランド)
4	Bangkok Sweetly
5	サック・シード
6	Fabulous 30
7	30+ Single on Sale
8	Teng Nong Jiwon Bin (テーン・ノーン チーウォン・ビン)
9	Love Julinsee (Love at 4 Size)
10	The Moon
13	ウモーン・パー・ムアン ― 羅生門
26	Love Summer
42	カメラリア

2009年から潮目が変わるのが見て取れる。既に他の論考[平松 2013]でも触れたが、「BTS-Bangkok Traffic (Love) Story (รถไฟผ่านห่านเธอ)」(2009)によりタイ映画界はロマンティック・コメディ全盛時代に入っていた。「伝統的な」ドタバタ・コメディ映画も健在で現在でも根強い人気を誇るが、そこから少し離れたところで、しっとりとした大人のロマンティック・コメディ映画の出現をみたのだ。その前段階として、2003年1位の「フェーンチャン ぼくの恋人(แฟนฉัน)」から始まり、2006年4位「早春譜(Seasons Change)」、2007年14位「ミウの歌〜Love of Siam〜(รักแห่งสยาม)」などを経た蓄積が存在していた。いずれもチューラーロンコーン大学マスコミ学部出身の新進の同人的なグループのメンバーが監督で、のち大手の音楽会社グラミーと合体しGTH社となった。GTH社は、近年におけるタイ映画製作の最大のヒットメーカーとなり、「BTS…」以降も、2010年1位「アンニョン! 君の名は(กวน มึน โฮ)」、2012年1位「ATMエラー (ATM เออรัก เออเธอ)」、2014年1位「アイ・ファイン、サンキュー、ラブ・ユー (ไอพาย..แต่ก็ว..เลิฟยู)」と立て続けに大ヒットを飛ばしている。その他にも、韓流グループ2PMのメンバーでタイ国籍のニックンも登場する2012年の「セブン・サムシング (รัก7ปี ดิวหน)」(3位)や、大阪アジア映画祭でも評判のよかった2015年の「フリーランス (ฟรีแลนซ์)」(2位)などで上位を独占し、ロマンティック・コメディ路線を盤石なものにしている。

近年のタイ映画を牽引してきたものの、現在は解体(離縁?)したGTH社製作映画の絶頂を示すのは、2013年の「愛しのゴースト (พี่มาก..พระโขนง)」である。2千万ドルに近い興行収入という今後たやすくは抜かれそうにない記録を打ち立てた。ところでこの作品は「取扱注意」であって、ホラーの系列に入れる人が多いが、それは適切ではない。ロマンティック・コメディである。今手元に資料がないが、公開時のある雑誌で読んだ映画監督の意図も、まず、既に名の売っていた4人のコメディアン俳優グループを活かして映画を作ることであった。4人の力量を活かすのには題材は何かいいかと思案した時、伝統のメー・ナーク・プラカノンのテーマに行き着いた。メー・ナークの奇譚話は、タイで何回となくリメイクされている伝説的女性幽霊譚であるが、その題材を借りたのである(ただし4人は主演ではなく、助演である。メー・ナークに関しては日本語の文献では四方田[2009]が詳しい)。しかしあくまで題材を借りただけで、ホラー映画製作を意図したわけ

表 タイ映画興行収入ランク2012年~2015年

2012年
1 ATMエラー
2 Crazy Crying Lady
3 セブン・サムシング
4 Valentine Sweetly
5 Yak The Giant King
6 I Miss U
7 サラネー おせっかい
8 Jan Dara the Beginning
9 Super Salary Man
10 3 A.M.
2013年
1 愛しのゴースト
2 Hello Yasothorn 3
3 マッハ! 無限大(トム・ヤム・クン 2)
4 Fud Jung To (ファット・チャン・ト)
5 メナムの残照
6 Make Me Shudde
7 H Project (Hashima Project)
8 Jan Dara the Avenger
9 Long Weekend (Tong Suk 13)
10 Love in the Rain
2014年
1 アイ・ファイン、サンキュー、ラブ・ユー
2 King Naresuan 5
3 先生の日記
4 The Swimmers
5 タイムライン
6 Call Me Bad Girl
7 Chiang Khan Story
8 Love Slave
9 3 A.M. Part 2
10 O.T.Phi Overtime (O.T.ピー・オーバータイム)
11 Plae Kao (プレー・カオ)
2015年
1 King Naresuan 6
2 フリーランス
3 May Who?
4 Arpat (アーパット)
5 Single Lady
6 LoveU100k
7 Pantainorasingha (パンタイノーラシン)
8 Senior
9 Hor Taew Tak 5
10 Mae Bia (メー・ビア)

ではない。結果的に従来のメー・ナークものとはまったく雰囲気違った作品となったのは当然である。コメディが基調の映画といってもいい。メー・ナークの夫のピー・マークの名前の由来さえもが、父がThe United State of Americaからきた宣教師だったのでMarkと名付けられた、などと「ダジャレ」を映画の中でとばしている。またこの作品で特徴的なのは、最後に幽霊と人間が共生するといった点である。メー・ナー

クは最後には一同の誤解を解き、お寺の修復まで手伝う。今までの映画での、結局は人間と幽霊は一緒に住めないで幽霊は自分の世界へ帰っていかねばならないという見えない壁を破った。加えて、ピー・マークの「戦場では君のことだけ考えていた、国家のことなどどうでもよかった」などという台詞も見られ、従来の映画では、恋のために国家の犠牲となることはあっても、国家を否定することはなかったのを鑑みれば、実に新鮮な新時代の言葉である。既に国家を論じる必要はなくなったのかという隔世の感さえ覚える。

「愛しのゴースト」の興行収益は、2位以下と一桁違う、まさに桁違いの大差をつけている。その後もGHT社は、蒼井そらが重要な役柄で出演した2014年の「アイ・ファイン、サンキュー、ラブ・ユー」が、2位の「King Naresuan 5」を上回った。公開すれば常に1位が定位置であった「ナレースワン」シリーズの牙城をついに崩したのである（しかし、「King Naresuan 6」は2015年の1位となり、GTH社の「フリーランス」(2位)「May Who? (เมย์ไหน.. ไฟแรงเฟร)」(3位)を抜いて再び定位置に戻っている)。現在、ロマティック・コメディの系譜は同社以外にも波及し、タイ映画界全体に達している。

コメディ

一方、伝統の「純正」ドタバタ・コメディ映画では、多くの映画に出演しているコメディ俳優マムの存在が大きい。主演したローカル色の濃いドタバタ・コメディ「Hello Yasothorn (แหมม ยโสธร)」(2005年3位)も人気シリーズとなった。「Hello Yasothorn 2」(2009)は6位、「Hello Yasothorn 3」(2013)は2位につけている。マムの出演作品は膨大な数で、「マッハ」シリーズにもトニー・ジャーの相棒役でも出演している。2007年には主演のアクション・コメディ「アルティメット・エージェント (บอดี้การ์ด หน้าเหลี่ยม2)」で3位となっているが、国の威信をかけて製作され学校などを始め国民を「総動員」する「ナレースワン」シリーズの1・2位を等閑に付せば堂々の1位ともいえる。メムは同年11位のアクション・コメディ「The Odd Couple (คู่แสด)」でも刑事役のタイ在住の日本人俳優の大関正義(セキ・オーセキ)と共演し、タイ映画におけるトランスジェンダー表象では定番となっている女装のおとぼけ役を演じている。

マムの出演作品以外のコメディでは、「Noodle

Boxer (แสบสนิท ศิษย์ส่ายหน้า)」が2006年の1位となっている。コメディ映画には、多種の趣があり、ブラック・ユーモア満載の「きわもの」ともいえるかなり灰汁の強いものも多く存在するが、軽快な「ライトコメディ」ともいうべき、子供と一緒に家族でも安心して見られる「ブンチュー」シリーズのような「健全」な映画も存在する。「Boonchoo (บุญชู) 9」は2008年11位となっており、2010年には成績は振るわなかったものの「Boonchoo 10」も出され、今後ともまだまだ続いていきそうである。

LGBT映画

タイ映画で忘れてならないのはLGBTに関する映画であろう。「アタック・ナンバーハーフ」は既に挙げたが、2015年にもリメイクされている。2004年5位の「Spicy Beautyqueen in Bangkok (ปล้นนายยะ)」、2007年「バンコク・ラブ・ストーリー (เพื่อน...รักมีเงา)」、2010年「ジェリーフィッシュの恋 (Yes or No)」、2011年「カメラリア (Camellia)」(日本・韓国作品との3作オムニバス映画)などは、興行成績的にはすべてがヒットとはいえないまでも、社会に強い存在感を与えている。タイのみならず海外にも影響力があり、この分野では世界を牽引しているといっても過言ではないかもしれない。筆者の個人的見解では、「バンコク・ラブ・ストーリー」の出来が秀逸で、この系列の映画によく付属するお笑いなどの要素を一切排除し真正面から取り組んだ、極めて真面目なゲイの純愛かつ悲恋物語である。観た多くの人の胸が切なくなるのではなからうか。前述の「ミウの歌…」にも主題ではないが、高校生男子二人のほのかな愛情が描かれている。一方「ジェリーフィッシュの恋」は、寮で同じ部屋に住むことになった大学生のトム(男性的女性)とデイ(Ladyの略)の恋愛が描かれている。「ミウの歌…」「ジェリー…」とも、父親ではなく、母親に強烈に反対・妨害されるのは、現在のタイの実社会においても母親のプレッシャーが大きいためであろうか。階級差のある男女の恋愛・結婚でも、強固に反対するのは往年の映画では父親であるが、現在では母親の場合が多い。たとえば、「Plae Kao (แผลเก่า)」(2014年11位)は昔の小説を原作とした映画であり、1940年の初回映画化より数えて5回目のリメイク作品であるが(1977年映画の邦題は「傷あと」)、父親同士が対立したタイ版「ロミオとジュリエット」と言う者もある。特に、ヒロイン側の父親が絶対権力をふるい、娘の心配をす

る母親には何の権限もなく夫に虐待されて亡くなってさえしまう。対照的に、近年のテレビドラマ等では、父親は威圧的な妻が怖く、息子・娘を陰で見守る（応援する）立場にまわっている図がよくみられる。

アニメ

タイは近年、テレビも含めてアニメや3Dアニメ製作にも力を入れており、伸び盛りである。2006年2位の3Dアニメ「ブルー・エレファント(ถ้ำนกถ้ำ)」は好評を得て、2009年には続編「Khan Kluy 2」も作られ7位となっている。海外に負けず、タイ独自製作アニメでもここまでやれるのだ、との自信を一般視聴者の間にも高める結果になっている。

文学を原作とする映画

文学を研究している筆者が最も注目しているのは、主に文学作品をもとにしたパンテーワノップ・テーワクン監督の作品群である。2010年12位「Eternity(ชั่วฟ้าดินสลาย)」、2011年13位「ウモーン・パー・ムアン——羅生門(อุโมงค์ผาเมือง)」、2012年8位「Jan Dara the Beginning(จินดารา ปฐมบท)」、2013年8位「Jan Dara the Avenger(จินดารา ปัจฉิมบท)」、上述の「Plae Kao」、2015年10位「Mae Bia(แม่เบี้ย)」と成績としては上位には組み込めていないが、作品としては映像も美しく、内容も濃厚で、完成度は高い。「Eternity」はタイ映画界での最高の賞たるスパンナホーン賞を獲得している（本作の内容分析については平松[2016]を参照されたい）。ちなみに、順位は高くはないといっても、黒沢明「羅生門」の翻案であり舞台を北タイに置き換え僧侶をストーリーの中心に据えた「ウモーン・パー・ムアン——羅生門」は、タイを舞台としたハリウッド映画の「ハングオーバー!! 史上最悪の二日酔い、国境を越える(The Hangover Part II)」を興行収入で上まわっているし、「Plae Kao」はこれもタイを舞台とした小栗旬主演の「ルパン三世」より順位は遥かに上であった。

お坊さん

タイにはお国柄、お坊さんを題材とした作品も多い。2005年2位の「The Holy Man(หลวงพี่เท่ง)」はドタバタ・コメディであるが、「The Holy Man 2」(2008年4位)「The Holy Man 3」(2010年11位)と続編も含めてヒッ

トしている。対極的に、2013年13位の「The Shadow of Naga(นาคปรก)」は、一歩間違えると検閲の対象となりかねない重厚な作品であり、悪徳僧侶も出てくる。しかし、最後に改心してよき僧侶となる一人の青年によって話自体が救われる。2015年4位の「Arpat(อาปัต)」も同工異曲であろうか。こちらは検閲を受けて内容の一部をカットし、さらに「アーバット」(破戒)が「アーバット」と改題された。「進め! 電波少年」が「進めぬ…」となったようなものであろう。お坊さんを主題としても、コメディから社会派までバリエーションに富み、視点の幅が広く懐が深いといえるのも、タイの特徴であろう。

国際映画祭

2010年の「ブンミおじさんの森(ลุงบุญมีระลึกชาติ)」は、カンヌ映画祭でパルムドール賞をとったことで日本でも抜群の知名度があるが、タイ国内ではまったく評価の対象にならないくらいの圏外である。床に莫塵を引いてその上に食器を並べてみんなで分け合って食べるのが田舎の一般の習慣であるにもかかわらず、富裕な家庭でもないのに椅子に座って綺麗な食卓を囲むといった、過度に西洋社会の観客や映画批評家を意識したシーンを持つこの映画が、タイで受け入れられないのは当然かもしれない。アピチャートポーン監督の作品テーマ自体に海外の視点に迎合したような匂いを嗅ぎつけることも案外簡単であろう。しかし、同じように海外の視点を意識してはいるものの、ムエタイ技全開の「マッハ」のようにアクションやコメディ要素が入ると、タイでも気に入られる可能性はある。

タイ映画と日本

最後に「日本」が関係する映画について触れておこう。すでに挙げた「チョコレート・ファイター」では阿部寛が主人公の父親のやくざ役で登場し抜群の存在感を示している。「The Odd Couple」でママとコンビを組んだ大関は「Yamada The Samurai of Ayothaya(ชาญโร อโยธยา)」(2010)でも主演をこなしている。ただし成績は振るわなかった。日本人女優出演映画では「Jan Dara」前編・後編にセクシー女優の西野翔が主人公の妹役で出演している。「アイ・ファイン、サンキュー、ラブ・ユー」が大ヒットしたが、同じ蒼井そら

が出演している4作オムニバス映画の「夏休み ハートはドキドキ! (ปีดเทอมใหญ่ หัวใจว้าวุ่น)」も2008年の2位とヒットしている。ほかに、2008年の「Itimi / Kill Tim (อิติมิตายัน)」(明日香出演)や2011年の「Love Summer (เลิฟซัมเมอร์)」(辰巳ゆい出演)などがあるが、ヒットしたとは言いがたい。タイ人女性を演じた西野翔を除き、いずれもタイを訪れた軽い感じの日本人女性役で出演している。

2012年の7位に入っている「サラネー おせっかい (สารเนน โอเซ็กไก)」は毎回主人公が破天荒なことをする映画「サラネー」シリーズの一作であるが、今回はドッキリカメラ風で日本に進出している。日本でも知名度のある女性歌手コンビのネコ・ジャンプもひっかけられ役で出てくるが、日本人も数多く出演している。タイ人俳優にドッキリを仕掛けるためにペナルティのワッキー(脇田寧人)が見事なタイ語を披露している。日本が舞台の映画製作は近年盛んである。日本へのビザが免除される以前は、タイ人にとってビザ不要で気軽にいけた韓国旅行が流行っていたが、その影響はヨン様やコーリープリンス1号店の足跡をたどりながらタイ人の男女が恋に落ちるドタバタ劇の「アンニョン! 君の名は」にみられる。日本へのビザなし渡航の解禁後は堰を切ったように日本旅行ブームとなったが、日本での映画ロケもラッシュとなった。北海道、九州などの日本の地方の市町村とタイアッパして製作された映画も多い。2016年9月公開の「一日だけの恋人 (แฟนเดีย..แฟนกันแค่วันเดียว)」の舞台は札幌の雪まつりで、「アンニョン…」と同監督であるが、大手グラミーと離れて自分の作風に専念できるようになったためか、本作ではコメディ要素を極限に抑えた悲恋ロマンスに仕上がっている。コメディ要素がなかったためか前作のような圧倒的な支持は集めなかった模様である。しかし、今後のタイ映画の動向を左右する重要な作品となるかもしれない。ほかに日本を舞台とした映画で10位以内に入っているものは、成田でロケをしたコメディの「Fud Jung To (ฟุด จัง โต)」(2013年4位)、長崎県の「軍艦島」が舞台のホラー「H Project (Hashima Project) (ฮาซิมะ โปรเจกต์)」(同7位)などがある。

また2015年3位の「May Who?」には日本人は出てこないもののバンコクにある日本人学校が舞台という設定になっており、日本アニメの協力も得ている。それ以外で興味深いところでは、2008年6位の「ランカスカ海戦 パイレーツ・ウォー (ปืนใหญ่ จอมสลัด)」で、山田長政という設定(最後のクレジットで判明)のサムライ

や悪の海賊軍団に加担する倭寇たる忍者が登場することが挙げられる(平松[近刊a]参照)。

摺筆のまえに、世界の文学・映画の中で最も好意的に描かれた日本軍人といっても過言ではないコボリ大尉が出てくる「メナムの残照 (คู่กรรม)」(2013)について触れておかねばなるまい。残虐な日本兵表象の多い世界の映画はおろか、タイ映画自体の中でも、好青年コボリのような日本軍人は特殊である。たとえば、2005年9位の「Seven Street Fighters (7ประจัญบาน 2)」では、日本軍人は徹底的に茶化されて描かれており、最後は日本でも悪がきがいたずらでよくやるような「浣腸」のリンチを7名のタイ人救国無頼漢に受けて悶絶して死ぬといった、笑いのアイテムと化している。「メナムの残照」は今回で4回目の映画化ではあるが(映画・テレビドラマ化に関しては平松[近刊b]参照)、ロマンティック・コメディの全盛を反映してか、従来の重い色調は取れ、オープニングの曲からしてコミカルな調子であり、全体的に軽快なテンポである。途中アンジェラ・アキの「手紙〜拝啓15の君へ」も挿入されて、感動場面でいい味を出しているが、評判にはならなかった。成績こそ5位にはつけているものの、首位とは一桁差があり、成功したとはいえない。運が悪かったせいもある。1位の「愛しのゴースト」がほぼ同時期に上映されたため(「愛しの…」が1週間ほど先行して公開)、話題はすべてもっていかれた。公開前は鳴り物入りで宣伝していたものの、少なくとも上映期間中に人々の口に上がる話題は「メナムの残照」ではなかった。いうなれば、相手が悪すぎて、反比例的に評価も低空飛行を続け、いまだに尾を引いている観がある。あるいはそもそもにおいて、小説を原作とする「メナムの残照」はロマンティック・コメディの趨勢に乗るよう軌道修正する必要はなく、独自路線で屹立している方がよかったのかもしれない。文学作品が得意の前述のテーワクン監督がメガホンを握っていたならどうなっていたらうかと、勝手な想像をしてみると、無責任ではあるが面白い。

以上、駆け足ではあるが、主として興行成績の点から、この10年強のタイ映画の潮流の特徴を概観した。

参考文献

- 平松秀樹 2013 「[タイ]新しいヒロイン像——日本・韓国表象とともに」(『地域研究[総特集] 混成アジア映画の海』13巻2号)289-298。
- 平松秀樹 2016 「ノラの如く、自由を求める——『天地果てるまで』:ヒロインの飛翔と失墜」 山本博之・篠崎香織編『たたかうヒロイン——混成アジア映画研究2015』(CIAS Discussion Paper 60)、京都大学地域研究統合情報センター、17-24。
- 平松秀樹 近刊a 「タイと海賊」 稲賀繁美編『海賊史観から見た世界史の再構築』思文閣出版。
- 平松秀樹 近刊b 「トムヤンティの『メナムの残照』にみるコボリの表象——ポストコロニアルな山田長政?」 橋本順光編『帝国主義対アジア主義——もうひとつの日タイ交流史』ミネルヴァ書房)。
- 四方田犬彦 2009 『怪奇天国アジア』白水社。
- タイ映画ライブラリー 〈<http://www.asia-network.co.in/Boxoffice.htm>〉(最終閲覧2016年11月1日)。